

# Gプロジェクト2009

## －トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略－

佐々木 亘, 三浦嘉久, 森永初代, 濱崎千鶴, 中村民恵, 末永勝征

G Project 2009  
－ Triple Power Refreshing Educational Strategy －

Wataru Sasaki, Yoshihisa Miura, Hatsuyo Morinaga,  
Chizuru Hamasaki, Tamie Nakamura, Katsuyuki Suenaga

---

Gプロジェクトとは、以下の五つの柱からなる、現代ビジネスコースの教育戦略である。

1. グループ活動を通して、コミュニケーション能力の育成を目指す。
2. 各プロデュースを選択することにより、個性の伸長を図る。
3. 集団で研究し具体的に発表する。
4. 各プロデュースの教育によって、総合的な人間性を高める。
5. 特別に開発されたプログラムが根幹となっている。

このプロジェクトは、高度化支援という目的で平成20年度から文部科学省より特別補助の交付を受けて行なっている。この報告は、平成21年度におけるGプロジェクトの取り組みに関するものである。

**Key Words:** [コミュニケーション力][グループ力][プロデュース力][大学祭]  
[デジタルアーカイブ]

---

(Received September 24, 2010)

### 序

現代ビジネスコースでは、グループでのコミュニケーションを通じて集団でプロデュースする力の育成を目指し、特別にプログラムされた教科に基づき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。この教育戦略実現のため、学生の個々の能力をリフレッシュさせ、さらなる集団的プロデュース力をより現実的なものにしていく。一年次に「学芸プロデュース」、「情報プロデュース」、「テキストスタイルプロデュース」、「フードプロデュース」の四つのプログラムに関連する基礎的な知識・技能を学ばせる。何よりも学生自身が自分の性格や能力を理解・発見し、将来のキャリアを自己形成できるように指導する。そのうえで一年次の終わりに、どのプログラムが自分に適しているかを選択させる。二年次で

---

\*鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

は各プログラムにおいて、グループワークとして製作活動に着手し、個性豊かな作品等を完成させ、特に大学祭に向けて、様々な観点から公の場でのプレゼンテーションに取り組んでいった。また学習の成果である制作物は年度ごとに学園祭で発表を行うとともに、卒業後もその成果を後輩の学習の教材となるようデジタルアーカイブ化している。

「特別研究」における各プロデュースの授業を通して、他者の理解を得て協力するために必要な「コミュニケーション力」、他者と協調しながら目的達成のために協働する「グループ力」、そして前二者の力を基盤とし、目的を達成するための戦略を構想し、それを実現するために必要な「プロデュース力」の三つの力を育成するよう、可能な限り努力した。

「学芸プロデュース」では動く絵本作りを行ない、これは大学祭・学内研究発表会で発表され、大変好評を得た。また、大学祭の催し物のコーナーでは、絵本の読み聞かせも行なった。「テキスタイルプロデュース」では、大学祭で舞台発表を行ない、盛況であった。また、パッチワークによる作品の展示も好評を博した。「フードプロデュース」では、鹿児島の郷土料理に関する様々な実習を行なうと同時に、大学祭では「Gカフェ」を運営し、一・二年生が一致協力して、憩いの空間作りに成功した。「情報プロデュース」では、電子媒体を通じて多方面から記録を作成することによって、より濃密なデジタルアーカイブを構築することが可能になった。

具体的には四つのプロデュースを学生が自主的に選択し、さらに細かくグループを編成して、各グループにおいて実践的にコミュニケーション力、グループ力、プロデュース力を修得していった。その成果は、DVD等のメディアに記憶され、後輩たちにとって、貴重な財産になるものと期待される。

本報告は、平成21年度に行なわれたGプロジェクトの内容に関する情報発信を意図している。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告を一つの反省材料として、さらなる発展を模索していくことになるであろう。

## I. Gプロジェクトとは

Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略－コミュニケーション力・グループ力・プロデュース力の育成－」という課題で、文部科学省の特別補助である「学部教育の高度化・個性化支援メニュー群」における「教育・学習方法等改善支援」の交付を受けて、進められている。その目的は以下の通りである。

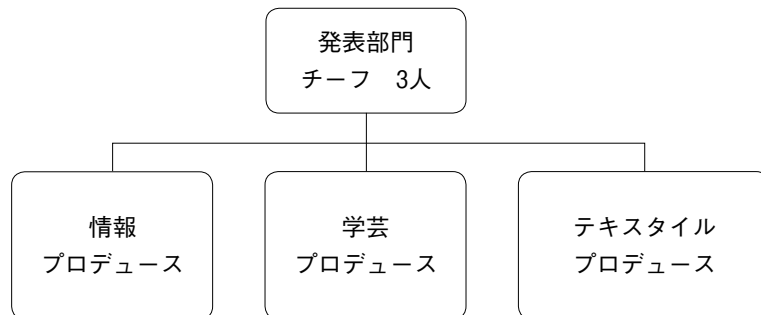
最近の学生は、個性は非常に豊かではあるが、一方、協調性や共生的能力が不足している面もみられる。現代ビジネスコースでは、グループでのコミュニケーションを通じて集団でプロデュースする力の育成を目指し、特別にプログラムされた教科に基づき、個性の伸長を図るとともに、学生の総合的な人間性を高める。この教育戦略実現のため、学生の個々の能力をリフレッシュさせ、さらなる集団的プロデュース力をより現実的なものにしていく。

このように、“Gプロジェクト”とは、グループ活動を通してコミュニケーション能力の育成を目指すという、特別に開発されたプログラムが根幹となっている。それは、「学芸プロデュース」、「情報プロデュース」、「テキスタイルプロデュース」、「フードプロデュース」の四つのプログラムである。学生の自主的な選択に基づき四つのグループを編成し、各グループにおいて

実践的にコミュニケーション力、グループ力、プロデュース力を修得させ、その成果を大学祭等で具体的にプレゼンテーションしていくわけである。各プロデュースを選択することにより、個性の伸長を図ると同時に、集団で研究し具体的に発表するというプロデュースを通じて総合的な人間性を高め、育んでいくことに教育的な戦略がある。「あなたがプロデュース！」を目標に、実践的な学習をとおして「多角的な視点」を身につけ、人と社会に貢献できる魅力的な女性を育成することが、最終的な目標となる。

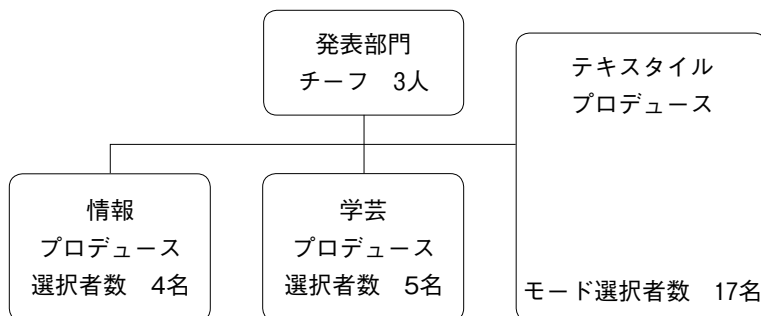
二年次に学芸プロデュース、情報プロデュース、テキスタイルプロデュース、フードプロデュースのうちから、それぞれ好きな科目を選択する。教員からも様々な指示を与えるが、基本的には学生自身が主体的に活動する。その集大成として、大学祭では舞台発表や食品販売等を行い、また、活動の記録をデジタルとアナログの両方の媒体で記録に残して、後輩たちにとって貴重な財産となるように保存する。

Gプロジェクトの主な発表の場は大学祭である。発表部門に関しては、次のような組織図をもとに、具体化させていった。



プロジェクト開始時の大学祭における発表舞台の組織予定図 (図1)

プロジェクト開始時はバランスよく機能されると期待していたが、受講者の役割が多いテキスタイルプロデュース（モード選択者）がプロジェクトの中心を担う結果となった。しかし、各プロデュースと連携をとりながら活動するように徹底させた。一つのテーマを決めて発表するということが学生たちのチームワークにより成果を挙げたのではないかと考えられる。



プロジェクト進行中の大学祭における発表舞台の組織図 (図2)

## Ⅱ. 各プロデュースの発表までのプロセス

平成21年度は各プロデュースの大学祭までのプロセスを各リーダーである学生に学内研究発表会で報告させた。以下、この学生の報告を掲載し、これに基づいて各指導教員が教育の効果を考察し、「結び」で本プロジェクトの意義を展望する。

### 1. 学芸プロデュースの報告

学芸プロデュースでは、発表部門における「動く絵本」の作成を中心に活動した。その製作過程は以下のようなものである。

#### (1) 絵本製作から発表までの過程

1. テーマ・主人公の決定
2. ストーリーと構成の決定
3. 作画
4. スキャニング
5. 微調整
6. 舞台発表練習

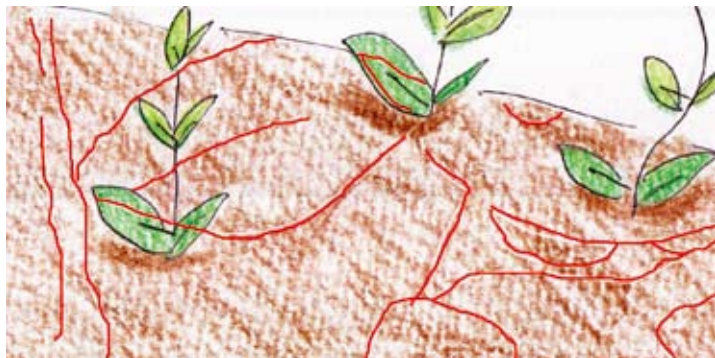
#### (2) 取り組みの内容

まず絵本のテーマを決めるために本学の図書館へ行き、現在どのような絵本があるのかを調査した。そこで様々な絵本に刺激されパソコンを使用した仕掛け絵本を製作し、発表することにした。その際、最初からパソコンを使用するのではなく、手書きの絵をスキャンしてパソコン (Mac) に取り込み、動くように工夫した点が特徴と言えよう。

最初に題材を決め、主人公を決定する。Gプロジェクトのテーマが「はな」だったので、「学芸プロデュース」は花畑と協力をテーマに絵本製作を始めた。このストーリーを作る際、表現があやふやになったり、結局何を伝えたらいいのか趣旨が分からなくなってしまわないよう、打合せにはかなりの時間をかけ、全員で協力し、ストーリーを完成させることができた。

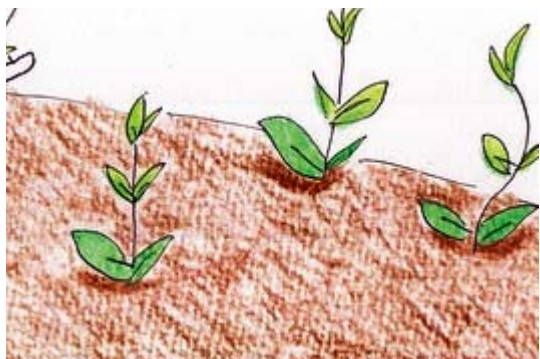
絵本の構成として、なるべくシンプルなものにするよう心掛けた。工夫した点は、始めは主人公の心情を分かりやすくするために敢えて白黒にし、終結に向かって、対照的にたくさんの色を使って彩色した点である。また、原画を手書きにこだわり、色鉛筆や絵の具などを使うことでパソコンでは出し切れない絵本独特の温かみを表現することができた。

次に、この出来上がった原画をスキャンし、パソコン (Mac) に取り込み、ゆっくりとめくられていくようにKeynoteで製作した。原画を取り込む際の影や、下書きの段階で入ってしまう線などをPhotoshopを使って修正した。手書きの原画をパソコンで修正するのは難しいと思いついていたが、Photoshopのコピースタンプを使えば、手書きの原画でも問題なく修正することができた。また、パソコン上と舞台のスクリーン上では色が微妙に異なり、iPhotoを使って調整するのも予想以上に時間を要した。



(図3 修正前)

上の絵にあるペン入れの痕をPhotoshopのコピースタンプで修正すると、下のようになった。



(図4 修正後)

完成した作品が、大学祭で発表した絵本「カラフル」である。活動を通して、人と人との繋がりの大切さや、読み聞かせや本を読むことは、豊かな人間性をはぐくむ基本となることが分かるなど、とても貴重な経験ができた。



図5 カラフル



図6 最終ページ

(執筆 小園由貴 現代ビジネスコース二年 平成22年3月卒業)

### (3) 考察

取り組みについては、学生の自主性・主体性に任せた。多くの試行錯誤を繰り返したようだが、相互に活発なコミュニケーションを展開し、一致団結して創造性豊かな作品を完成させることができた。

## 2. テキスタイルプロデュースの報告

テキスタイルプロデュースは、オリジナルデザインのモード製作とパッチワーク製作に分かれて製作活動した。モード製作は自らがデザイン・製作・着装・舞台発表までを一つの過程とする。今回は特に舞台発表を中心に報告がなされた。



図7 第三部「ルミエール」ファイナル

### (1) 取り組みの内容

テキスタイルプロデュースのモード製作が中心となって活動した発表部門は、情報プロデュース、学芸プロデュース、テキスタイルプロデュースの三部構成で舞台発表を作り上げた。まず、舞台発表を行うにあたり、発表部門としてテキスタイルプロデュースから3人のリーダーを選出し、各プロデュースのリーダーと話し合いを行なった。今年度の舞台発表には、三つのプロデュースが協力し、統一感のある舞台を仕上げることを目標に掲げた。そのために、「はな」というテーマを設け、各プロデュースで作品を製作していくことになった。

また第一部、第二部、第三部、それぞれに「はな」に関わる言葉で名前をつけ、連結感を表現した。第一部「テール」は、情報プロデュースのオープニング映像、第二部「オウ」は、学芸プロデュースの動く絵本、そして第三部「ルミエール」が、テキスタイルプロデュース・モード製作の作品ショーである。

花は一輪でも綺麗だが、花束になったときにその華やかさ、美しさはさらに倍増する。その美しさをいかに表現するかでいろいろと苦勞していたが、全員の意思を統一する意味でもエンディングにおいて、それぞれが白いバラの花を身につけて舞台上がることで、「はな」の表現を強調させることができた。

三つのプロデュースが、どのようにしてテーマに沿った作品を作るか、しっかりと統一されているのか、全体を見ることは難しいものであった。また、各プロデュース間の連絡や意思疎通が上手くいかないこともあったが、話し合いを重ねていくうちに円滑に活動を進めることができた。そして、この舞台発表の成功に欠かせないのが裏方の存在である。リーダーは、舞台だけではなく、裏方の学生にも細かい指示を出さなければ全体はまとまらなかったことを痛感した。

(執筆 若竹なぎさ 現代ビジネスコース二年 平成22年3月卒業)

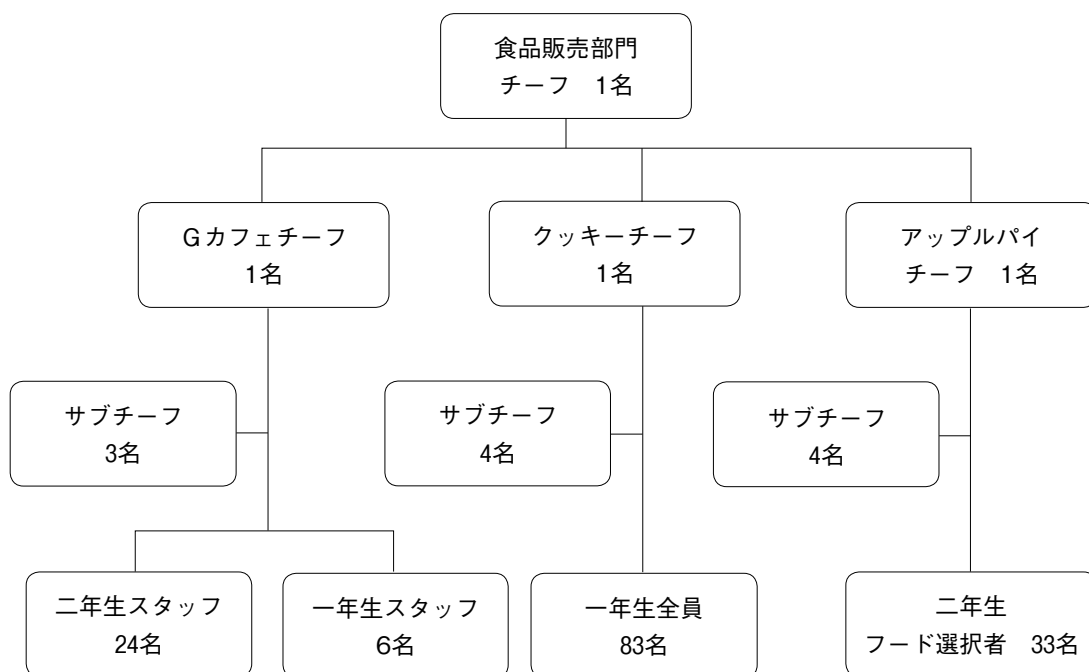
## (2) 考察

この経験を通して、学生自身は、自分のやるべき仕事を狭い範囲で考えるのではなく、周りを見渡し自分がどうしたらよいのかを理解し、仕事に取り組まなければならないことを、身をもって知ったのである。計画の立案と仕事の実行を通じて感じ取った緊張感と危機感、そしてリーダーとしての責任感は、まさにトリプルパワーの修得につながったと思われる。

また、テキスタイルプロデュース・パッチワーク製作では、展示部門で、作品を壁一面に展示し会場を華やかに演出した。「豊かな表現力を磨く」「個性を生み出す力」は同じ目標である。発表部門においては、学生は自身を花に例え、多彩な色、デザインのドレスを作ることで華やかさを表現し、その表現力を磨いた。大学祭での作品ショーは、例年多くの観客を集めるほど、学内だけではなく地域社会にも根付いた発表となっており、製作活動には自ずと力が入った。魅せるということに重点をおき、「魅力学」で学んだ外面的な美しさと内面的な美しさ、精神面での美しさがより一層学生たちを輝かせた。製作活動の合間を見てはウォーキングの練習をし、美しく表現するためには何が大切であるかも舞台発表から学んだと言えよう。

## 3. フードプロデュースの報告

フードプロデュースでは、鹿児島県の郷土料理に関する学習を通じて実践力を培うと同時に、大学祭では、以下の組織図のもとに、Gプロジェクトを推進した。



プロジェクト開始時の大学祭における食品販売部門の組織図 (図8)

(1) 取り組みの内容

フードプロデュースでは、純大祭に向けてGカフェの飲み物の商品開発を行なった。平成20年度のコーヒーを使ったメニューは10種類、ティーを使ったメニューは2種類、ココアなどその他のメニューは4種類、合計16種類の飲み物を販売した。売上げは10万500円であった。

そこで、検討した結果、21年度はティー系のメニューを増やすこととした。新商品の基本方針として、郷土鹿児島のものを是非とも使用したいという意見が学生から上がった。そこから、鹿児島の特産品である黒糖をシロップとして使うというアイデアが生まれた。ティーと呼ばれるものには、紅茶・緑茶・ほうじ茶・ハーブティーなどがある。その中でもほうじ茶が黒糖と意外に合っており、しかも値段も安いので原価を下げる事ができるので、早速新商品開発に取り掛かった。出来上がったものが「黒糖ほうじ茶ラテ」である。販売価格は200円とした。この新商品をキャンパス見学会で試飲してもらい、高校生にアンケートを行ったところ、意外な組み合わせで美味しいとの意見が多かった。

この結果をもとに試行錯誤を繰り返し、新作を販売することができた。当日までの間、新商品PRとしてポスターの作成やチラシ作りに力を注いだ。黒糖ほうじ茶ラテの売上自体は予定していた量よりも売れ行きは伸びなかった。しかし、二日間の全体の売上は、16万9700円と満足のいく結果となった。昨年より7万円近く売上がアップしたのは、Gカフェのメニューの改善とサービスの向上ではないだろうか。

また、品質の向上を図るために、今年度は地元鹿児島の「ヴォアラコーヒー」の豆を使用し、美味しいコーヒーの入れ方の指導を受け、お客様に喜んでいただける商品が提供できたのではないかと考えている。結果として、一年二年ともに協力し成功させることはできたが、情報交換をスムーズに行うために選出したはずのサブリーダーを上手く活用させることができず、情報が行き渡らなかった点もあった。もっと話し合いの場を設定する必要がある。

(執筆 根比慶子・奥絵里佳 現代ビジネスコース二年 平成22年3月卒業)

メニューの種類	販売数 (H20年)	販売数 (H21年)
コーヒー系	10	6
ティー系	2	5
その他	4	4
合計	16	15

図9 Gカフェでの販売数

黒糖	13 g
ほうじ茶	100 g
牛乳	50 g
フォームミルク	大さじ2
黒糖パウダー	適量

図10 「黒糖ほうじ茶ラテ」の分量

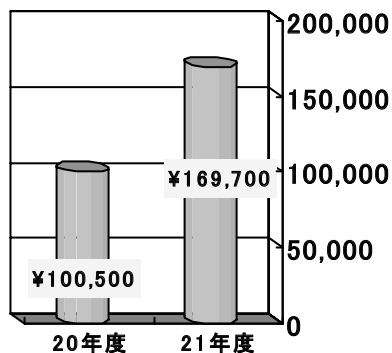


図11 売上金額



## (2) 考察

リーダーだけが目標を持つのではなく、みんなで話し合い、目標を決めそれに向かって団結することが求められる。大切なことは学生がお互いに相手が何を考え、何をしているのかを積極的に知る姿勢を持つことであり、これがプロジェクトを遂行するにあたり大事である。特に、情報を共有する体制をリーダーの学生が構築する必要性を体験し、コミュニケーション能力を高めることが何よりプロジェクトを成功させるために重要であることを学んだと言えよう。



図12 Gカフェ スタッフ

## 4. 情報プロデュースの報告

情報プロデュースでは、純大祭の発表部門用にショートムービーを作成した。

### (1) 取り組みの内容

大学祭での舞台発表は時間にすれば90秒弱の作品であったが、それに要した時間はおよそ半年以上という長きにわたった。

現在のパソコン技術には様々な技能があることに驚き、そこに新たな自分の可能性への挑戦として製作活動に取り組んだ。最新機器を揃えたパソコン室を思う存分に利用できる恵まれた状況の中、ショートムービー作成に精力的に取り組んだ。

情報プロデュース選択者は少人数であったため、チーフもサブチーフも一人で担当した。そこで、チーフ会には必ず参加し、純大祭に関する情報をいち早く入手し、横との繋がりを密にするよう心がけた。

チーフ会では、それぞれのプロデュースの具体的な計画が決定されていく。少人数のため他のプロデュースに比べて遅れ気味であったが、先生方からの具体的な指摘を受けて、表現方法として思い描いたのがNHKの番組「プロジェクトX」である。実際、「プロジェクトX」や「プロフェッショナル」とかいうドキュメンタリー番組に興味があり、努力している人、一途に物事に打ち込む人の横顔というのは理屈抜きで格好いいものだと実感させられる。そして番組のはじめ、放送内容を凝縮した導入シーンは、番組の内容が凝縮されており、特に興味深い。

そこで、Gプロジェクトの予告動画を作成することにした。それぞれのプロデュースで行なわれていることは、それ自体輝いている。自分で脚本を考え絵本を作ること、様々な色合いを考えてピースとおしをパッチワークしていくこと、ドレスを着て作品ショーに出ること、大勢を束ねカフェを開店すること、これらはどれか一つなら誰でも出来ることの一つかもしれないが、これを全てこなせるという人はいない。このすばらしい企画を是非とも効果的にヴィジュアル



図13 MacのソフトiMovie

アルで伝えたい。それが情報プロデュースの具体的な目的となった。

また、みんなが今からしようとしていることを記録したい、みんなの努力している姿を一秒たりとも撮るのがしたくないし、その真剣な表情や努力の軌跡は、必ず観る人の鑑賞に堪えうるものになるはずだ。出来上がったショートムービーは、大学祭でのGプロジェクトのオープニングを華々しく演出することができたと思う。



図14 ショートムービー

(執筆 中島聡子 現代ビジネスコース二年 平成22年3月卒業)

## (2) 考察

プロジェクトを進行する過程において、ひとりの学生が製作した作品となってしまったが、各部門のリーダーと自ら積極的に連携を図り、他者を理解しようと努力したことがわかる。製作過程においてはひとりであったとしてもプロジェクトをまとめ、大学祭で発表するまでには多くの学生との協働する「グループ力」の育成は培われたのではないかと考えている。

## 結び トリプルパワーの育成

今回、「Gプロジェクト」を通じて、学生は自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。学生たちは、苦勞したこと、頑張ったことで得た達成感など様々なことを経験することができ、同時にその中で自分に足りない部分を痛感し、その部分と向き合うことで自分自身を成長させることができたと言えよう。

特にリーダーの学生は、簡単そうに見える「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さを実感したはずである。ここで経験したことを生かし、これから新人として社会に出る学生たちが、自らコミュニケーションをとるように心掛け、自分がどうあるべきか状況判断のできる人材として働いていけるようになることを切望している。

各プロデュースの活動の成果を後輩に残すために、記録としてDVDを製作した。最終的な発表の場面だけでなく、そこに至る過程を客観的に記録することにより、このプロジェクトが将来的な価値を有することになる。デジタルアーカイブには、未来への可能性が秘められている。

我々のプロジェクトの最終目的は、「コミュニケーション力」、「グループ力」、そして「プロデュース力」というトリプルパワーをリフレッシュさせ、学生一人一人の人間性を総合的に向上させることに尽きる。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けられる。そこに、我々の教育戦略があるのである。

本稿は、平成21年度文部科学省特別補助「学部教育の高度化・個性化支援メニュー群」における「教育・学習方法等改善支援」による、教育成果の一部である。